

● シリーズ 私の見た日本 Vol.172

日本とインドネシアの再建文化

Mirzadelya Devanastya

(ミルザデリア・デバナスティヤ)



インドネシア、スマトラ島のメダン町に生まれたジャワ島人。小学1年生から3年生までを大阪で過ごし、子供時代は日本とインドネシアの両方の経験があります。2013年インドネシア大学を卒業、専門は伝統建築研究。卒業後ジャカルタ首都特別州の建築アトリエで働き、2017年に東北大学大学院、五十嵐研究室の留学生として入学し、伝統建築についての研究を続けています。

インドネシアで建築学生になり、様々な国の建築を学びましたが、なかでも興味を持ったのは伝統建築でした。伝統建築を学ぶと、建築がその場に住んでいる人々の文化や歴史、周りの環境にどの様に影響を受けてきたのかが分かります。現在は東北大学の留学生として、日本の伝統建築について勉強しています。日本への関心は建築的な観点からだけではなく、子供の頃の経験も影響しています。日本に初めて来たのは20年前で、母が大阪大学に留学していたことから、小学生の頃の約3年間を日本で過ごしました。その時に住んでいた家は古い木造の家で、まだ子供だったので建築としてのその家の面白さには気づきませんでした。とても快適でした。その後、インドネシアで伝統建築を勉強し、日本とインドネシア、この2つの国の建築を比較すると面白いのではないかと思いました。

東北大学に来る前に、日本の伝統建築を調べました。富山の白川郷や、福島の大内宿、京都の美山かやぶきの里など、沢山ありますが、なかでも伊勢神宮はインドネシアにも見られる再建文化を象徴する建築としてとても興味を持ちました。インドネシアの伝統建築は日本と同じように木造で釘などを使わない接合技術で建てられています。また、1つの家を村全体で一緒に建てるため、若者は家づくりが得意な大人と一緒に作業しながら家の建て方を学ぶことができます。これは大昔からの文化で、伝統建築の形や建て方を現在に伝えています。最初に伊勢神宮の事を聞いた時には「あ、これは面白そう。絶対いつか伊勢に行って本物を見て空間を感じてみたい」と思いました。そして、日本に来てから1年半後に念願の伊勢に行く機会があり、神宮を見て感じる事ができました。

伊勢外宮参道のお店や人通りの賑やかさは神宮の橋を渡り、鳥居を抜けると消え、まるで別世界に来た感じがしました。神宮の建物自体は神社の最奥にあり、森を通り抜けた後、

木製の壁の上から神宮の茅葺屋根がようやく見えるようになります。五十鈴川を渡り最初の鳥居を通り抜けた途端無意識に沈黙し、自分が歩きながらつくり出す砂利の音に夢中になりました。何世紀も前からある古い偉大な木々に囲まれ、木々がつくる奇妙な光の中でぼんやりと大昔の日本に戻ってきたかのように感じました。外宮と内宮は数km離れていて、その辺りには神宮を取り巻くいくつかの神社があります。これらの神社も本社と同様に定期的に再建されます。インドネシアにも様々な礼拝所、モスクや教会、仏教やヒンドゥ教のお寺がありますが、日本の神社のように入り口から本殿までの移り変わりはありません。ほとんどは入り口に入るとすぐその建物が見えます。神宮のような移り変わりは現実の世界から神様が住む世界へと移行したような不思議な感覚でした。

時代を越える建物

何世代にもわたり再建された伊勢神宮は日本の建築の原型であり、日本人の自然素材の使い方、構造的な比例とスケールの感覚、スペースの取り決め、特に建築とそれを囲む

自然との調和、そのすべてがはっきりと見て取れるような気がします。多くの島々から成るインドネシアの伝統建築は、その場にある自然環境、気候、文化と宗教によって大きく異なります。木を主な材料とする島もあれば、竹を主な材料とする島もあり、その特性によって家の形や建設方法が島ごとに異なります。建物のスケールに関しても、人の存在が大切なので建物のサイズは人間の体で測っており、形は同じでもサイズはそれぞれの家の持ち主の特別なサイズになっています。インドネシアよりも統一された自然と文化を持つ日本では、昔から同じやり方で何度も再建されている伊勢神宮は日本建築の根源と言えます。昔から現在まで同じ知識を保つことができることは素晴らしいことだと思いました。

伊勢神宮の再建文化はユニークな時間の流れを生み出しています。伊勢は大昔からの建物だと言えますが、再建された現在の建物はたった5年だけの建物とも言えます。もちろんこの先も伊勢神宮は遠い未来まで存在するのですが、2033年に再建されるので現在の建物はあと15年の命しかないとも言えます。神宮自体の歴史は永遠に残っているよう



左/インドネシア、アロール島の伝統建築の屋根再建前 右上/再建中 右下/再建後



左上/伊勢神宮(外宮)の雰囲気 中上/豊受大神宮の隣の空き地。2033年はこちらに再建される 右上/土地の中心、豊受大神宮はここに建てられる 左下/遠くから見た豊受大神宮 中下/2013年に再建され、5年経過したがまだ新しく見える 右下/外宮風宮

に見えますが、同時に現時点の一部であることを意味するのではないかと思います。

一方、伊勢神宮と違い、インドネシアでの伝統建築の再建は部分的に行っています。これは建物に使っている材料の寿命に関係があります。茅葺でつくられた屋根、竹でつくられた壁、木材の柱や梁、各建物の部分の状態に応じて異なる時期に行われます。インドネシアの季節は夏と雨季の2つしかありませんが、建物の素材に影響する極端な変化があります。夏の昼の気温は34℃で夜は25℃、雨季の降水量は300mmで1日中雨が降っているのが普通です。そのため、建物の材料は壊れやすくなり、例えば茅葺屋根は最大5年間、竹の壁は最大5年から10年間しか持続できず、傷んだ部分だけ取り替える必要があります。一度に全体を再建しないので神宮と違って建物の年齢は若いのか古いのかはっきりしません。しかし、再建はいつでもできるのでその為の儀式は伊勢神宮の20年に1度行う式年遷宮とは異なり、いつでも見ることができます。

伊勢神宮のこの時間の感覚は建物自体だけではなく、使われる材料にも見ることができます。伊勢神宮はインドネシアと同じく自然からの材料を使って建てられ、その材料の命は神宮の一部であり続けていくものと言えます。材料として使われる予定の樹木は再建の数年前から選択され、管理されています。したがって、樹木の存在は建物の一部になる

前、何百年もの過去にまで存在感が広がっています。一方で、この選ばれた樹木は切られ、川に流され、木材に加工された後にまた数年かかって保存されます。この樹木はやがてボード、厚板、そして梁になり、新たな神宮の建物の一部になります。ということは、伊勢の木材は何百年も古いものですが、数年または数カ月しか経っていないとも言えます。その後、新しい建物が出来上がってから数カ月後に古い建物は解体されます。解体された古いパーツは、伊勢のお守りの一部となり、発売され日本全国の家庭用祭壇に置かれるものもあります。伊勢神宮の広がりは過去、現在、そして未来をつなげるだけではなく、空間の境界を越えることを実現しました。これはインドネシアにはないもので、日本のなかでも伊勢神宮だけにしか見られない特別なことだと思います。式年遷宮の時にも様々な場所から人々が伊勢を訪れ、時間と空間の境界だけではなく、地理的境界を越えることが伊勢神宮の面白さだと思います。

再建された建築の大切さ

古代神社の形態は、宗教の文脈からも導かれました。神道の信念によると、神社建築において単純さ、純度、調和は、重要なことだと考えられます。おそらく日本では神が住む空間を飾ることは重要なことではなく、その空間をつくることに重点が置かれているのだと思います。そして、神を迎える儀式の方

が、空間を飾ることより重視されています。この点において日本とインドネシアは大きく異なります。インドネシアでの神聖な空間にはオーナメントや彫刻などの飾りが多く見られます。特にその空間で一番重要な4つの中央柱は下から上まで彫刻で飾られ、人と神様の物語を伝える柱となります。

伊勢神宮は日本人の文化的記憶に長年にわたり存在しています。伊勢は文化の連続性を提供しながら何世紀もの変化に耐えてきました。それだけではなく、人間と神とのつながりが数多くの世代にわたって広がり、未来の世代のために準備されています。伊勢とインドネシアの伝統建築に共通して存在するのは、物理的な構造だけではなく、連続的な儀式であると思います。何世代にもわたって再建されるのでどちらの建物も安定した形を保っていますが、実際に安定しているのは儀式の周期的なパフォーマンスと言えます。この2つの場所のモニュメンタリティーは建物そのものではなく、再建の儀式なのではないでしょうか。時空間に存在するものは永遠ではないと思います。これを克服する唯一の方法は、定期的に更新することです。伊勢神宮はインドネシアの伝統建築と同じように、神社に関連した自然素材の様々なあり方や信念の伝播を通じ、持続性を達成したと思われる。